

小林一茶 「へら鷺や 水が冷たい 歩き様」

江戸時代を代表する俳諧師の小林一茶（1763-1828）は長野県北部の農家の長男として生まれた。3歳で母と死別し、8歳から義母と暮らすことになる。15歳のときに江戸に奉公に出され、やがて俳諧の道で頭角をあらわす。

29歳のとき、いったん故郷に戻り、翌年から36歳まで近畿、四国、九州などへ俳諧修行の旅に出る。39歳のとき、ふたたび帰郷したところ父が倒れ、1カ月後に死亡した。以後、12年間にわたって義母・異母弟と遺産相続問題で争う。江戸に戻って俳諧の宗匠を務めながらも、自分の相続権は譲らなかった。

遺産問題が決着し、江戸の生活を清算して50歳でふたたび故郷に帰る。その2年後に結婚し、3男1女をもうけるものの、いずれも幼くして亡くなった。妻も若くして世を去り、2番目の妻とは半年で離婚。3番目の妻とのあいだにもうけた



娘は一茶の死後に生まれた。

文政10年（1827年）7月に生家のある柏原村を大火が襲い、母屋を失う。一茶は焼け残った土蔵で暮らし、その年の11月に土蔵の中で65歳の一生を終えた。

父母と故郷への痛切な思慕

一茶の人生は「継子一茶」といわれたように義母との確執を抜きに語ることはできない。義母との不仲で一茶は暗く孤独な幼少年時代を送ることになった。有名な「我と来て遊べや親のない雀」などの代表句の心理的下地はここでつくられたと、いっていいだろう。

義母や異母弟との振れに振れた関係は12年間に及ぶ遺産相続争いとして爆発する。両者で遺産の折半の折り合いがついたあとも、一茶は自己相続分の家屋と田畑を継母たちが勝手に使っていたとして使用料まで要求している。まさに異常ともいえる執念だ。

こうした行為は裏返してみると、父母と故郷に対する強烈な思慕のあらわれと受け止めることもできる。一茶は何度となく郷里へ舞い戻り、江戸で俳諧の宗匠としての地位を築いたあとも、最後には自分が生まれた土地で終焉を迎えた。

たとえ土蔵のなかの淋しい死であったとしても、江戸に奉公に出された少年時代の痛切な郷愁だけは終着駅で充たされたのかもしれない。

妻子との相次ぐ別れ

一茶の生涯を語るうえで欠かせないもうひとつの特徴は妻子との相次ぐ悲劇的な離別だ。彼が柏原村で過ごした57歳のときの出来事を俳句・俳文集として編纂した『おらが春』にはわずか一年で亡くなった長女さとに対する「名月を取ってくれろと泣く子かな」などの哀しみが率直に綴られている。

さとの死の一年後に次男が生まれたときは石のように丈夫に育つようにとの願いから石太郎と名づけている。しかしその石太郎も3カ月後には亡くなってしまふ。「巖には疾くなれさざれ石太郎」という句には大きな岩のように速く逞しく育ってほしいという親心が詠み込まれている。

晩年の一茶は親鸞の浄土真宗に帰依し、大いなるものに生かされているという他力本願を信心する。それはあまりにも過酷な運命があるがままに受け入れようとする一茶の必死の諦念と見做してもまちがいでないだろう。

雑草のように生きる力

表題の「へら鷺や水が冷たい歩き様」は一茶が48～56歳のときの句日記である『七番日記』に収められている。

一茶は身近な動植物にみずからを仮託した句を数多くつくった。冷たい水のなかを歩く「へら鷺」



もまた彼の孤独な生きざまを投影したものにはほかならない。

しかし同時に一茶の句風からは不思議と悲愴な雰囲気は漂ってこない。むしろ温かみのある仄かなペーソスとユーモアさえ感じられる。

故郷と江戸を頻繁に行き来した一茶は俳諧師としての顔のほかに小市民＝小農民としての旺盛な生きる力をそなえていた。いわばその雑草のような生命力が彼の俳句的小宇宙の奥底に脈々と溢れている。（高倉）

参考文献

- 『新訂・一茶俳句集』岩波文庫
- 『七番日記上・下』岩波文庫
- 『父の終焉日記・おらが春他一編』岩波文庫
- 『小林一茶』中公文庫
- 『一茶』文春文庫
- 『小林一茶』集英社新書

